

第6学年1組 特別活動（学級活動）指導案

授業者 八神 裕之

展開場所 自教室

1 題材名 「大地震に備える」

2 題材について

(1) 題材の目的と内容について

学校保健法等の一部を改正する法律として「学校保健安全法」が平成21年4月に施行され、また、学習指導要領の改訂でも、総則に安全に関する指導が新たに規定され、安全に関する指導の充実が求められている。

このような中、平成23年3月11日の東日本大震災は、国内最大規模となるマグニチュード9.0を記録し、その直後に発生した大津波とあわせて甚大な被害をもたらし、多くの人命が失われた。この震災は、これまでの想定をはるかに上回るもので、多くの教訓を残した。その一つに、想定やマニュアルだけにとらわれることなく、児童生徒や教職員が様々な状況に応じて判断し、より適切な行動を取れるよう、日頃から防災訓練や防災教育をすべきであるということである。文部科学省では、平成24年3月に「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」を作成し、全国の学校に配布して防災教育の充実を図るようにした。千葉県教育委員会や千葉市教育委員会も、「学校防災マニュアル」の改訂を行い、防災教育の重要性が叫ばれている。とりわけ、首都直下地震、千葉県東方沖地震、南海トラフ地震等も懸念されており、緊急の課題となっている。

本校でも、学校の防災マニュアルを改訂し、防災管理と防災教育の推進をするために、いろいろな行事や教育活動に取り組んでいる。関連した教科（社会・理科・体育）や特別活動（学級活動・学校行事）などにおいて、防災教育のカリキュラムや指導資料を作成して、各学級を中心に計画的に実践している。

また、地震発生を想定した避難訓練を児童だけでなく、保護者や学校敷地内に施設を有する団体（高齢者福祉センターと子どもルーム）の職員や利用者も参加して行っている。さらに、親子で通学路における地震発生時の危険箇所の点検活動も行っている。PTAや地域関係団体と連携して、ハイゼット（災害救護用炊飯袋）による炊飯体験や避難所宿泊体験（体育館に段ボールを敷いての宿泊）などの体験学習も行っている。

防災教育で最も大切なことは、まず自分自身の安全を確保することである。本題材では、地震防災を自分の問題として意識や関心を高め、実際に地震災害が発生した場合に、「児童が様々な状況の中で、知識や経験をもとに、より適切に判断し、自分の身を守りながら迅速に行動できる力」を、つけさせたいと考えている。

(2) 児童及び家庭・地域の実態から

意識面では、「大きな地震を怖くない」と感じている子どもが約半数と多く、しかも、その中には「ぜんぜん怖くない」と答えた子が3割ほどもいた。東日本大震災の当日は、稲毛区の震度が5弱であり、激しい揺れや二次災害を含めて、今まで大きな地震被害を経験していないからであろう。また、東日本

大震災当時は、いろいろな面で怖い思いをしたはずであるが、一年半経って忘れてしまっている子どもも多い。大地震の写真やビデオを見せたり、体験者から話を聞いたりして、地震の怖さを少しでも感じ取らせたい。

大きな被害を伴う大地震の発生についても、「少し大きな地震は来るかもしれないが、震度7のような大地震は、たぶん起きないだろう。」「建物、電柱、ブロック塀の倒壊、地面の亀裂、火災などの大きな被害もないだろう。」と、楽観的に考えている子どもがとても多かった。これは、前述したように、大地震や大きな地震災害を経験していないこと、東日本大震災当日に学区においてほとんど被害がなかったことが大きな理由と考えられる。また、保護者の意識も大きく影響していると思われる。

そこで、本題材や理科（土地の作りと変化の学習）などをとおして、大地震がいつ起きてもおかしくないことをつかませたい。特に、地震のメカニズムや日本の状況などから、日本が世界有数の地震大国で、震度6弱以上の大きな地震が2000年からほぼ毎年発生しており、日本は地震が多発する宿命にあることもつかませたい。そのためにも、地震に関する基礎的な知識を正しく把握させ、大地震に備える学習へとつなげる必要がある。

行動面では、毎年行っている地震避難訓練の成果として、地震発生時には机の下などに入って頭を守ること、避難時には「おかしも（押さない、かけない、しゃべらない、戻らない）」が大切だと、スローガンの的につかんでいるだけである。しかし、実際に大地震が発生した場合、教師と一緒にいる授業中だけではないので、登下校中や家庭にいるときも含めて、様々な状況下でも適切に判断し迅速な行動できるようにするようになりたい。そのために、本題材では、シミュレーション的な学習を取り入れて、できるだけ具体的な行動ができるようになりたい。

また、保護者の地震防災に対する意識は高いとは言えず、家族での地震防災の話し合いも十分に行われていない。避難持ち出し品や備蓄品を準備している家庭も多くない。地域の関係団体は、地震防災への関心が高く、各種の会議や活動を積極的に進めているが、地域の防災行事への参加に対しては消極的な家庭が多い。今回の学習をとおして、家族で地震防災に備えることや地域の防災行事にも進んで参加する大切さも学ばせたい。

（3）問題を自分のものとさせる工夫（当事者意識を持たせるシミュレーション学習の工夫）

大地震による激しい揺れや大きな地震被害を経験していない子どもたちには、災害を実感させることが難しく、災害の恐ろしさがなかなか伝わりにくい。被災経験がなければ自分の問題として、受け止める当事者意識が持ちにくく主体的な学習とはなかなか得ない。このような心情に迫るためには、体験を自分の体験と仮想して考えていくことを促す手立てが必要となる。そこで、ワークショップ型のシミュレーション学習による「クロスロード」（地震発生時の防災対応カードゲーム）と「DIG」の活動を授業に取り入れることにした。

① 「クロスロード」

クロスロードは、災害対応を自らの問題として考え、さまざまな意見や価値観を話し合いながら、様々な状況下においてよりよい行動ができることを目的としている。既存のクロスロードは、一般成人用として開発されたものであるため、小学校高学年児童を対象としたカードを作成した。作成にあたっては、学校や地域の実情や児童の実態を生かすようにした。

大地震が発生した場合、実際には様々な状況の下で、いろいろなジレンマを伴う重大な判断や決

断に迫られることがある。その判断や決断をする場面をシミュレーションすることが、クロスロードでは可能になる。

実際に大地震が起きたことを想定して、ゲームを展開していくため、おのずと当事者意識を持って、どちらを選んでもリスクや犠牲を伴うことから、「決められない、迷う」といった様相で真剣に話し合いをすると考えている。

② DIG訓練

DIG訓練は、「災害想像ゲーム」【Disaster(災害)、Imagination(想像)、Game(ゲーム)】の略称で、別名「災害図上訓練」ともよばれ、地図上で災害が起きたことを想定して、作業や活動を行っていくものである。リスク・コミュニケーションの手法の一つで、いわば手作りのハザードマップの役割を果たし、事前に危険を予測できるとともに、避難経路、避難場所、避難行動、避難準備などに役立てることができる。

本校の地域で、大地震が発生した場合に、一次災害として考えられることは、学校を含む建物内外の損壊、ロッカーや家具の転倒や破損、窓ガラスの破損、ブロック塀・電柱・自動販売機の倒壊、道路や歩道での亀裂・損壊など、崖になっている場所の崩落などであろう。二次災害としては、火災、停電、断水、そして国道16号線や高速道路の交通網の寸断に伴う大渋滞、電話等の通信網の寸断などが考えられる。津波や液状化については、地域は台地（標高約30m）にあり、海や川からも離れているので、津波や液状化の心配はないと考えられる。このDIG訓練をとおして、地域の実態や実情に応じた適切な避難行動ができるようにさせたい。

(4) 指導構想

今回の学習では、1時間目で、大きな災害をもたらした阪神・淡路大震災（内陸型地震・直下型地震）や東日本大震災（海溝型地震）の写真やビデオを見せたり、阪神・淡路大震災後に現地を視察された学校長から話を聞いたりして、地震の怖さを感じ取らせる。また、基礎的な地震の知識（マグニチュード、震度）や校内での避難行動を扱う。

2時間目で、防災ゲーム「クロスロード」を行う。実際の災害時には、様々な状況でのジレンマを伴う重大かつ即座に判断や決断が要求されることが多い。その判断や決断をする場面を、シミュレーションするゲームである。「クロスロード」は、あらかじめ定められた正解を学んだり、覚えたりする学習ではない。ゲームをとおして、「クロスロード」には正解がないことを学ばせながら、二者択一のジレンマを伴う選択の中で、「あちらが立てばこちらが立たず、しかもいろいろな考えの人がいる。しかし、それなりの結論を出して先に進まなければならない。」という防災の本質をとらえさせたい。

3時間目は、登下校中や学校外での避難行動を扱う。1問1答式の知的な活動ではなく、ワークショップ型の作業的なシミュレーション学習「DIG訓練」を取り上げ、児童の主体的な学習となるようにする。

4時間目では、家庭における非常持ち出し品の準備、地震発生時に家族で集まる場所の確認、家族で外出した時の避難行動、家族で防災会議を行う必要性などを学習して、自分の安全だけでなく家族の安全も守られるようにしたい。また、学習した子どもをとおして、家庭での防災意識が高まるようにしたいと考えている。

3 児童の実態（男子11人、女子10人 計21人） 平成24年9月6日実態調査

(1) 【知識面】

① 「震度」と「マグニチュード」の意味や知っていることを書きましょう。

○震度

- ・わからない 9名（43%）
- ・ゆれの大きさ 6名（29%）
- ・地震の大きさ 5名（24%）
- ・地震の強さ 1名

○マグニチュード

- ・わからない 12名（57%）
- ・地震そのものの大きさまたは、規模 5名（24%）
- ・地震の被害 1名

② 災害伝言ダイヤルを知っていますか。

ア 知っている人は、使い方を書いてください。2名（10%）

○どこに行ったかを書く。1名

○インターネットの災害伝言板に自分がどうしているかをメッセージに残す。1名

イ 知らない。 19名（90%）

③ 地震がどうして起きるのか知っていますか。

ア 知っている 8名（38%）

○プレートがずれるから 6名 ○海のプレートと陸のプレートがずれるから 1名

○石盤と石盤が重なり合ってはねるから 1名 ○火山の活動によって 1名

イ 知らない 9名（43%）

ウ どちらともいえない 4名（19%）

④ 地震の種類を知っていますか。

ア 知っている 5名（24%）

○マグニチュード 1名 ○余震、首都直下地震 1名

○急に地震が来る 1名 ○縦揺れ、横揺れ、津波が来る地震の揺れ 1名

イ 知らない 12名（57%）

ウ どちらともいえない 4名（19%）

(2) 【意識面】

⑤ 大きな地震が発生したら、こわいですか。

ア とてもこわい 3名（14%）

イ こわい 3名（14%）

ウ どちらでもない 4名（19%）

エ 少しこわい 5名（24%）

オ ぜんぜんこわくない 6名（28%）

(3) [思考判断力]

⑥ 大きな地震が、登校の途中に起きたら、どうしますか。

- ア 家にもどる。4名 (19%)
- イ そのまま学校に行く。10名 (48%)
- ウ その他 近いほうへ行く4名 (19%) その場にいる、臨機応変、各1名
- エ わからない 1名

⑦ 大きな地震が、下校の途中に起きたら、どうしますか。

- ア 学校に戻る。8名 (38%)
- イ そのまま家に帰る。5名 (24%)
- ウ その他 近いほうへ行く4名 (19%)
その場にいる、建物がない所へ行く、臨機応変、各1名
- エ わからない 1名

⑧ 大きな地震が、登下校の途中に起きたら、どんな危険なことが発生すると思いますか。

- 木や電柱が倒れる 12名 (57%) ○建物やブロックが倒れる 7名 (33%)
- 津波が来る 5名 (24%) ○火事 3名 (14%) ○地割れ 2名 (10%)
- ガラスが割れる、落下物にあたる、家族と離ればなれになる、わからない 各1名

⑨ 大きな地震のあとに、危ないことや困ったりすることが起こるとしたら、どんなことですか。

- 津波 6名 (29%) ○停電 (含むガス) 4名 (19%)
- 物が落下 3名 (14%) ○火事 3名 ○余震 3名 ○家が崩れる 3名
- 家や木が倒れる 3名 (14%)
- 物が倒れて下敷きになる、食料がなくなる、今後の生活 各2名
- 避難生活になる、食料不足、電話がつながりにくくなる、地割れ、事故、ペット、
断水、地割れ、大切なものがなくなる、物が落ちて自分にあたる 各1名
- わからない 2名

⑩ 大きな地震が発生したら、家の中でどんなことが起きますか。

- 物が落ちる 8名 (38%) ○物が倒れる 7名 (33%) ○物が割れる 4名 (19%)
- 家が倒れる、火事、箆筒が飛び出る、物が飛んでくる、ぐしゃぐしゃになる、わからない
各1名

⑪ バスやモノレールに乗っているとき、大きな地震が起きました。あなたは、どうしますか。

- そのまま待つ 6名 (29%) ○運転手の指示に従う 5名 (24%)
- 駅に着いたらすぐ降りる 2名
- みんなについていく 2名 ○わからない 2名
- 脱出する方法を考える、席に座る、伏せる、乗り物から降りる 各1名

- ⑫ 家の人が留守中、一人で家にいるとき、大きな地震が起きました。あなたはどうしますか。
- 机の下にもぐる 7名 (33%)
 - 親に知らせてどうすればいいか聞く 3名 (14%)
 - 家のドアを開ける 3名
 - 安全な所へ行く、外へ出る 各2名
 - 火の元を確認する 1名

- ⑬ 休み時間に大きな地震が発生したら、どうしますか。

ア 教室

- 机の下にもぐる 13名 (62%)
- 校庭へ行く 7名 (33%)

イ 校庭

- そのまま (校庭の真中へ) 16名 (76%)
- 物が無い場所へ 2名 (10%)
- 教室へ戻る 1名
- 避難所へ 1名

ウ 廊下

- 校庭へ 9名 (43%)
- 自分の教室に戻ってから校庭へ 3名 (14%)
- 近くの机にもぐり、おさまったら校庭へ 3名 (14%)
- 近くの教室へ 2名 (10%)
- 壁のすみでおさまるまで待つ 2名
- 窓の近くへ、近い出口から逃げる 各1名

エ トイレ

- 揺れがおさまるまで、そこにいる 5名 (24%)
- トイレのドアを開ける 5名 (24%)
- すぐ出て逃げる 3名 (14%)
- 教室へ戻り校庭へ、教室の机の下へ、すぐ校庭へ 各2名

オ 図書室

- 机の下にもぐる 13名 (62%)
- すぐ校庭へ 3名 (14%)
- 教室へもどり校庭へ、廊下へ 各2名

カ 空中廊下

- すぐ校舎へ移動する 9名 (43%)
- 空中廊下を離れて校庭へ 6名 (29%)
- じっとする 2名 (10%)
- 教室に戻る、壁につく 各1名

- ⑭ バスで校外学習に行ったり、家族で外出したりした時に、大きな地震が発生しました。あなたは
どうしますか。

ア 海岸

- 高い所へ逃げる 13名 (62%)
- その場から離れる 3名 (14%)
- その場から動かない 2名
- 街の方へ逃げる、大人の指示に従う 各1名

【実態調査の考察】

(1) 知識面について

①から「震度」と「マグニチュード」の違いをとらえている子は、いなかった。地震が起こるわけや地震の種類を知っている子はほとんどいない。また、③の地震がどうして起きるのか知っている子が3割強で、プレートの原因であることを知っていた。④の「地震の種類を知っているか」については、ほとんどの子が、知らなかった。答えは、「海溝型地震」と「内陸型地震（直下型地震）」である。そこで、地震の基礎的な知識を学ぶことを題材の導入で行い、大地震に備える学習へとつなげていきたい。

(2) 意識面について

⑤の地震に対する怖さについては、大きな地震が発生したら、怖くないと答える子どもが5割、そのうちぜんぜん怖くないと答えた子が3割ほどもいた。東日本大震災当日の稲毛区の震度が5弱であり、激しい揺れや二次災害を含めて大きな被害を経験していないからであろう。また、東日本大震災当時は、いろいろな面で怖い思いをしたことを一年半経って忘れていく子どもも多いようだ。さらに、17年前に起きた阪神・淡路大震災についても誕生する前の地震のために、地震や災害の怖さは、よくわからないようである。実際、震度6以上の大きな地震であれば、人は立つことさえできなくなり、周りの家具などが倒れるだけでなく、物が落下して来たり、建物などが倒壊したりして大きな恐怖感をいただくことになる。そこで、大地震の被害の様子を写真やビデオを見せたり、体験者から話を聞いたりして、地震の怖さを感じ取らせたい。

(3) 思考判断力について

⑦⑧の大きな地震が登下校中に起きたら、学校に行くか答えた子が4～5割いた。避難場所となる学校を選ぶ子が多かったのであろう。自宅か学校か近いほうへ行くか答えた子が2割ほどいた。今回の学習では、周りの地震の被害状況を見て、自宅か学校かを選ぶ思考判断力をつけさせていきたい。

⑨の大きな地震が登下校中に起きたら、建物やブロックが倒れると答えた子が3割と少ない。木や電柱が倒れると思っている子が5割強である。しかし、ガラスが割れると答えた子は1名しかいない。あやめ台小地区には、一戸建ての近くを通学路としている子どもも多く、ブロック塀の倒壊やがけ崩れ、団地の窓ガラスの落下などの危険性を再認識させていきたい。

⑩の「大きな地震のあとに、危ないことや困ったりすること」では、津波と答えた子が3割近くいる。東日本大震災の津波の様子をテレビで見たときの印象が強く、恐怖感をもったからであろう。あやめ台小は、標高が約30mと津波に対しては、ハザードマップからも危険性は低い。また、停電（ガスも含めて）が2割と少ない。さらに、断水すると答えた子が1名ということから、断水で困った経験がないからであろう。大きな地震後、困ったことでは、断水したことである。風呂に入れない、洗濯ができない、トイレの水が流せない、飲み水が足りないなどの資料【地震から1週間後くらいで困ったこと（阪神・淡路大震災の被災者へノアンケート）】を子どもに見せて普段からの備えの必要感を高めていきたい。

⑪の大きな地震が発生したら、ほとんどの子が、物が落ちる、物が倒れる、物が割れると答えているにもかかわらず、⑬では、家に一人でいるとき、机の下にもぐると答えた子は3割強と少ない。自宅にいて親が留守中であっても「自分の身は、自分で守る」という意識で、「すぐに机などの下にもぐる」「出口を確保する」「頭を守る」の3点を再確認させていきたい。

⑭の休み時間に大きな地震が発生したときについては、教室での避難訓練の経験が生かされておらず、机の下にもぐることが約6割、校庭に行くことが約3割であった。大事なことは、「すぐに机などの下にもぐり頭部を守る」また、「転倒しないように体を低くしたり、つかまったりする」行動をとることである。各場所においても、基本的には、これらのことを考えて行動できるようにしたい。

(4) 家庭での実践について

⑮の家族で外出した時の避難行動についてさまざまな考えが出ている。何が適切な行動であるかは状況によって違ってくる。高学年ともなると、家族と離れて行動することが多い。さまざまな状況下でいかに「自分の身は、自分で守る」という行動がとれるかが大事となる。さまざまな意見を出し合いながら、状況に応じた判断ができるようにさせたい。

⑯の「大きな地震が起きた時のために、家でどんな準備をしているか」では、食料品が約5割、飲料水が3割弱と少ない。さらに懐中電灯が2割、ラジオに至っては、1割である。わからない、何もしていない子を含めると約2割になる。家族で地震について話し合っ「いる」「いない」がほぼ半数である。いつ起きてもおかしくない大地震に対して、家族で話し合う必要性をつかませるとともに、チェックリストを作成して、防災の意識を高めていきたい。特に、家族で、いつでも避難できるように防災グッズや非常食等（3日程度）の備えもさせたい。

大地震を経験していない子どもたちに、防災ゲーム「クロスロード」や「DIG訓練」を行うことで大地震時、様々な場所での避難行動を話し合わせたい。避難行動に対する考え方が広がり、災害状況に応じて、適切な避難行動ができるような子どもたちを育てていきたい。さらに、家庭と連携しながら、家庭における防災意識の高揚を図り、家族で防災会議を開き、避難集合場所、防災グッズ、非常持ち出し品などの備えができるようにしたい。

4 題材の目標

- 地震災害に関する知識基本的な知識を習得する。
- 自分の命を守るために、周りの状況に応じて、最善を尽くそうとする「主体的に行動する態度」を育成する。
- シミュレーション学習である「クロスロード」と「DIG」をグループで協力して行い、地震防災の問題を自分のものとしながら、いつ、どこで大地震に遭っても対応できる力を身につける。
- 家族や身近な人々の安全も考えて、進んで協力しようとする態度を身につける。

5 題材構成（4時間扱い）

学習の目的	学習内容と活動	時配
地震の起こり方や種類を知るとともに、学校内外で地震が発生した場合の避難行動を考える。 地震の怖さを写真・ビデオ・体験者の話から感じ取る。	○地震の起こり方と種類を知る。 ○マグニチュードと震度の意味を知る。 ○地震による一次災害と二次災害を知る。 ○学校や家庭で大きな地震が発生した場合の適切な避難行動を考える。 ※阪神・淡路大震災後に、現地を視察された学校長から、地震の怖さや防災の大切さについて話を聞く。	1
「クロスロード」を行い、先生がいない校内の場所、登下校中、家族が留守の在宅中などで、大地震が発生した時に、様々な状況下で決断を要する場面について話し合い、思考・判断・実践力を高める。	○防災ゲーム「クロスロード」の必要性やルールをつかむ。 ○「クロスロード」を行い、大地震の時、校内、下校中、家族が留守中などに、ジレンマを伴う決断をする場面を、グループの友達と協力しながらシュミレーションする。 ○自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりしながら、よりよい判断や行動ができるようにする。	1 (本時)
大地震が発生した場合に、学区でどのような被害や危険があり、どのように対処したらよいかを「DIG訓練」とおして考える。	○震度7で、どのような被害が出るか予想させる。 ○6～8人の生活班で、「DIG訓練」を取り上げ、大地震が発生した場合に、登下校中や外出時などに危険と思われる場所と内容を考え、地図上にマーカーで書き込んだり塗ったりする。 ○危険な場所ごとの適切な避難行動を考え、付箋に書いて地図上に貼ったり、地図上に書き込んだりする。 ○班の代表者が、被害場所や避難行動を説明する。	1
災害時の避難行動を家族で話し合ったり、非常持ち出し品を準備したりする必要性をつかむとともに、家族で外出した時の避難行動を身につける。	○災害時の避難場所（集合場所）を決めたり、非常持ち出し品を準備したりする必要性を考える。 ○家族で外出した時の避難行動を考える。	1

5 本時の指導（2／4）

ねらい：「クロスロード」を行い、先生がいない校内の場所、登下校中、家族が留守の在宅中などで、大地震が発生した時に、様々な状況下で決断を要する場面について話し合い、友達の様々な意見や価値観を聞いて、いざという時の思考・判断・実践力を高める。

< 展開 >

時配	学習活動	○教師の支援・指導上の留意点	資料
<p>導入 5分</p>	<p>○前時を想起して、身を守る安全行動を確認する。</p> <p>○防災ゲーム「クロスロード」を行う必要性と意義を聞く。</p> <p>○防災ゲーム「クロスロード」のルールを確認する。</p>	<p>○学校内外で、大地震が発生した場合の避難行動を想起させる。</p> <p>○地震から身を守るためのシェイクアウトの3つの安全行動ドロップ（体を低くする）⇒カバー（頭・体を守る）⇒ホールド・オン（大きな揺れが収まるまでじっと待つ）を確認させる。また、「出口を確保する。」「危険なもの（本棚・家具、ブロック塀、窓ガラスなど）から離れる。」なども確認させる。</p> <p>○東日本大震災で、子どもが適切な自己判断で命を守ったことから、「クロスロード」を行って、自分の考えを持ったり、友達の考えを聞いたりすることが大切であることをつかませる。</p> <p>※大地震が発生した場合、様々な状況の下で、いろいろなジレンマを伴う重大な決断に迫られ、その決断をする場面をシミュレーションすることが、「クロスロード」で可能になることを理解させる。</p> <p>○【問題カードに対して「Yes」か「No」を選ぶ。→「Yes」「No」カードを裏向けで出す。→先生の合図で、一斉にカードをオープンする。→多数意見だった人は青カードがもらえる。ただし、グループの中に1人だけ違った意見の人は、金カードがもらえる。それ以外の人はカードをもらえない。→グループで一人ひとり「Yes」「No」の理由を聞く。→すべての問題カードを終えたときに、一番多くのポイントカードを持っていた人が勝ちとなる。】</p> <p>○ルールを書いた資料を用意し、ルールを思い出し、すぐにゲームができるようにする。</p>	<p>○掲示物</p> <p>○ルールを書いた資料</p>
<p>展開 30分</p>			<p>○問題カード</p> <p>○青カード</p> <p>○金カード</p> <p>※問題文は、学校や地域の実情や児童</p>

	<p>○本時の学習内容を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>大地震が発生して、とても困る場面に出会ったとき、どのように決断するかを考えて、自分の考えを話したり、友達の考えを聞いたりしよう。(防災ゲーム「クロスロード」をしよう。)</p> </div> <p>○グループのリーダーが先生の所に1枚目の問題カードを取りに来る。</p> <p>○リーダーが1枚目の問題を読む。</p> <p>○全員が「Yes」「No」カードを自分の前に裏向けで出す。</p> <p>○先生の合図で、一斉にカードをオープンする。</p> <p>○多数意見だった人は青カードをもらう。ただし、グループの中に1人だけ違った意見の人は金カードをもらう。それ以外の人はカードをもらわない。</p> <p>○グループで、一人一人に「Yes」「No」の理由を聞く。</p> <p>○グループのリーダーが、先生の所に2枚目の問題カードを取りに来て、「クロスロード」を行う。 ※以下 4枚目まで同様</p>	<p>○どのグループも同じペースで話し合えるように、問題カードは1枚ずつ教師が配るようにする。</p> <p>○1枚につき5分間のゲームとする。5分が過ぎたら、教師は、2枚目の問題カードを配るようにして、どのチームも4枚の問題カードができるようにする。</p> <p>○多数派、少数派が決まるように、奇数人数でのグループにする。偶数のグループで同数になった場合は、じゃんけんで決めさせる。</p> <p>○正解はないので、一人一人の意見を大事にして、決して否定しないで、意見を認めていくことで、いろいろな考えを出させる。友達の意見を最後まで温かく聞くようにさせる。</p> <p>※「クロスロード」は、あらかじめ定められた正解を学んだり、覚えたりする学習ではない。ゲームをとおして、「クロスロード」には正解がないことを学ばせ、二者択一のジレンマを伴う選択の中で、それなりの結論を出して先に進まなければならない。」という防災の本質をとらえさせる。</p>	<p>の実態を生かしたもので、実際に起こりうる状況下でジレンマを伴う内容とする。</p>
--	---	--	--

<p>終末 10分</p>	<p>○すべての問題カードを終えたとき、グループごとに一番多くのポイントカードを持っていた人に拍手をする。</p> <p>○本時を振り返り、振り返りカードに記入する。</p> <p>○全員で、今日のゲームを振り返って、努力やよい点を認め合う。</p> <p>○校長先生の話聞く。</p> <p>○次の授業の予告をする。</p>	<p>○グループを回りながら、発言力のある子、意見がしっかりしている子の考えに影響されて引っ張られている場合は、自分の考えを持つことの大切さや友達の考えを尊重するように働きかけたり、助言したりする。また、自分の考えがうまく持てない子どもにも、具体的な助言を行う。</p> <p>○カードにうまく書けない子には、個別に助言する。</p> <p>○グループの代表1人に、振り返りを述べてもらい、各グループの努力やよい点を認めるようにする。</p> <p>○校長先生から、「クロスロード」によるシミュレーションの大切さを伝えてもらうとともに、大きな地震の揺れの直後は、まず自分の身を守る「自助」が大切で、自身の安全を確保した上で、はじめて家族や友達などを助ける「共助」を行うことが可能になることを話してもらい、次時の学習につなげていく。</p> <p>○災害を想像するシミュレーションの「DIG訓練」（災害図上訓練）を行うことを告げる。</p>	<p>○振り返りカード</p> <p>○「DIG訓練」で使用する地図</p>
-------------------	---	---	--

関係資料

「クロスロード」の質問文

第1問

休み時間になり、2棟3階の図書室に本を返しに行きました。まだ、だれも来ていませんでした。急に、床が波打つような大きな地震が起こりました！！机の下にもぐり、ゆれがおさまるのを待ちました。

大きなゆれは、おさまりましたが、小さなゆれは続いていました。大急ぎで上ばきをはかないでひなんをしました。(あやめ台小では、上ばきをぬいで図書室に入ることになっています。)

2階に下りました。2階にはだれもいません。ガラス窓やかべがたくさんこわれて、床は、割れたガラスでいっぱいです。その時、また大きなゆれが起きました。

あなたは、そのまま校庭にひなんしますか？

YES or NO

第2問

1月の寒い日。母も父も、仕事に行っていました。一人で家で、留守番をしていました。

夕方になり、部屋の明かりをつけ、テレビを見ていました。

急に大地震が起こりました！！わたしは、すぐにテーブルの下にかくれました。ゆれが小さくなったので、テーブルから出ました。窓ガラスが割れ、食器だなや家具もたおれていました。テレビもたおれていました。部屋の明かりも消えました。

そのうち、外から消防車のサイレンが聞こえてきました。両親に何度も連らくをしようとしませんが、電話もけい帯電話も使えません。ときどき、大きなゆれが起きています。

そのまま、あなたは家で待ちますか？

YES or NO

第3問

学校が終わってから、家と学校のちょうど真ん中あたりで、急に、道路が波打つような大きな地震が起こりました！！わたしは、歩道の中央で大きなゆれがおさまるまで、しゃがんで待っていました。

ブロックべいや電柱がたおれています。道路に、大きな地割れもできています。近くに、だれもいません。

あなたは、家にもどりますか？

YES or NO

第4問

先生にたのまれて、二人で2棟2階の家庭科室に、道具を取りに行きました。

そのとき突然、大地震が起こりました。わたしは、なんとかつくえの下にもぐりこみました。

周りを見渡すと、たながいくつもたおれ、天井のけい光灯も落ちています。かべも大きくかたむいています。

「痛いよ。」という声がしたので、してみると友達が大きなたなの下じきになって、けがもしています。また、大きなゆれが起きました。

あなたは、すぐに友達を助けようとしていますか？

YES or NO

「第1時間目と第3時間目の指導内容」

○ 第1時間目（1／4）の指導案

ねらい：地震の起こり方や種類を知るとともに、学校内外で地震が発生した場合の避難行動を考える。

また、地震の怖さを写真・ビデオ・体験者の話などから感じ取る。

<展開>

時配	学習活動	○教師の支援・指導上の留意点	資料
5	○阪神・淡路大震災の災害写真を見る。 ○本時の学習内容を知る。	○大地震が起こると、大きな災害が起こることを感じられるような写真を見せ、見せる。（事前に教室に掲示して、見せておく。） ○マグニチュード7.3で、神戸市などで震度7の激しい揺れに見舞われた。	○阪神・淡路大震災の災害写真
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">日本の地震について知り、地震が発生した場合の避難行動を考えよう。</div>			
3（8）	○「マグニチュード」と「震度」の違いの資料を見る。	○「マグニチュード」と「震度」の違いを理解させる。豆電球と大きなライトで実演する。	○「マグニチュード」と「震度」の違いの資料
5（13）	○「震度と揺れなどの状況」の資料を見る。	○[震度7]の状況を資料のイラストから読み取らせ、すごい大きな揺れであることを把握させる。	○「震度と揺れなどの状況」の資料
5（18）	○震度6以上の地震の資料を見る。	○6年生が生まれた「2000年」から、去年5年生の時まで、36回も起きていることを把握させる。 ○有感地震だけでなく、無感地震も含めると1年間に何十回も地震が起きていることをおさえる。	○「震度6以上の地震」の資料 ○地震が発生する「資料」

5 (23)	○どうして日本は、地震が多いのか話を聞く。	○日本の周りには、2つの海のプレート（太平洋プレートとフィリピン海プレート）と2つの陸のプレート（ユーラシアプレートと北米プレート）がある。海のプレートが、陸のプレートに下に沈み込み、ひずみが蓄積し、ひずみが限界に達し、陸のプレートの先端が跳ね上がり、地震が発生することを「資料」を用いてわかりやすく説明する。	○「日本の地震活動」「世界の震源分布」の資料
3 (26)	○地震の起こり方と種類を知る。	○模造紙にかいた地震の起こり方を「海溝型地震」ということを説明する。もう1つ、プレート運動によるひずみが内陸部で断層を動かす「活断層地震」がある。授業の最初に見た写真の「阪神・淡路大震災」は、活断層地震であることを説明する。	○模造紙にかいた「地震の起こり方」の資料
3 (29)	○マグニチュードの大きさについて話を聞く。	○マグニチュードが1大きくなると、地震の大きさ（エネルギー）は、32倍になることをおさえる。	○マグニチュードが1大きくなると、地震の大きさ（エネルギー）は、32倍になる資料
7 (36)	○学校や家庭で大きな地震が発生した場合の適切な初期行動を考える。 ・教室 ・廊下 ・運動場 ・階段 ・空中廊下	○震度7の大地震が起きたら、どこであっても、「頭を守る」「よつんばいでしゃがむ」「周りの物につかまる」の行動をとることをおさえる。	
8 (44)	○阪神・淡路大震災の被害の様子を校長先生から聞く。	○実際に阪神・淡路大震災の被害を視察された校長先生の話聞くことで、地震の怖さを身近に感じさせる。	
1 (45)	○次時の予告を聞く。	○大きな地震が、校内にいるとき、下校時、家にいるときなどに起きた場合、いろいろなことが起きるので、どのような避難行動をするのか考えることを告げる。	

○ 第3時間目（3／4）の指導案

ねらい：大地震が発生した場合に、学区でどのような被害や危険があり、どのように対処したらよいかを「DIG訓練」をとおして考える。

<展開>

時配	学習活動	○教師の支援・指導上の留意点	資料
導入 3分	○震度7で、どのような被害が出るのか予想する。	○震度7で、どんな被害が出るか予想をたてさせる。被害の状況を予測させることで、この後、写真を見させて、震度7の被害があまりにも大きいことに愕然とさせたい。 ○児童の予想をすべて認める。被害を大きく見積もった児童は、実際に自分が述べたとおりの被害に切実感を持たせたい。	
5分	○平成7年1月17日午前5時46分に起こった阪神・淡路大震災の被害写真を見る。	○家が倒壊する、マンションが傾く、店のガラスが割れる、車の運転ができない、崖が崩れるなどあやめ台小学区で起こりうる被害に関連する写真を選んで、児童に見せるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神・淡路大震災の写真 ・OHC（実物投影機） ・テレビ
	<p>いつ起こってもおかしくない震度7クラスの大地震が、登下校中に起こりました。通学路では、どんな被害が出てくるのでしょうか。 （災害図上シミュレーション学習「DIG訓練」をしよう。）</p>		
10分	○6～8人の生活班で、自分の通学路で起こりそうな被害を学区地図に書く。書くとき、なぜそのような被害を予想したのか理由を述べる。	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の意見を大事にして、決して否定しないで、意見を認めていくことで、想定外の被害を出させる。 ○理由を述べさせることで、その場所の地形や危険度を児童に把握させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・模造紙大の学区地図 ・水性ペン

15分	○被害に対して、どのような行動をとるのか考え合い、付箋に書き、地図上に貼る。	○行動を1つだけに絞らず、ふさわしい行動が2つあれば、書いてよいこととし、臨機応変的な行動がとれるようにさせる。	
10分	○自分たちの地図を黒板に貼り、代表者は被害場所や避難行動を説明する。 ○次時の予告を聞く。	○恐怖感を抱くだけでなく、いつ大地震が起こっても適切な行動がとれるようにする。 ○非常持ち出し品や家族の避難集合場所について学習することを伝える。	